

**【研究紹介】**

## アニマル・セラピー —クライアントと介在犬とのマッチングシステムの開発—

今 木 康 彦

特定非営利活動法人北海道総合福祉研究センター（〒003-0029 札幌市白石区平和通5丁目北6番21）

### I. 動物介在介入の概要

#### 1. 動物介在介入の現状

アニマル・セラピーという言葉投げかけると、「癒し」「動物との触れ合い」「お年寄り」「施設への訪問」「ボランティア」などを連想する答えが多く返ってくる。これらの言葉は、日本のアニマル・セラピーの現状をよく表しており、アニマル・セラピーという言葉が国内で広く普及してきているものといえよう。日本の多くの地域で、犬などの動物とともに飼い主がボランティアとして高齢者などの施設等へ訪問し、その施設利用者等と動物との触れ合いをすることで楽しいひとときを過ごす活動が行われている。また、高齢者施設で高齢者が犬などの動物との触れ合いを通して表情の変化が現れ、施設職員もそれを認め高く評価をするようになってきた。さらに、施設等では動物介在介入を専門で学んできた人材を採用し始めているところもでてきているようである。

#### 2. アニマル・セラピーという言葉

アニマル・セラピーという表現を直訳するならば、「動物に対する療法」となる。しかし、日本で実施されているアニマル・セラピーの多くの場合は、人に対して行われている。つまり、アニマル・セラピーという言葉は、日本特有の表現であり、造語なのである。

動物介在介入の専門家らは、人と動物が触れ合う活動を動物介在活動（Animal Assisted Activities AAA）、人の治療および看護や介護をする過程において動物がその一部を介在する方法を動物介在療法（Animal Assisted Therapy AAT）、人の教育上の過程において動物がその一部を介在する方法を動物介在教育（Animal Assisted Education AAE）、そして、これらの総称として動物介在介入（Animal Assisted Interventions AAI）としている。日本特有のアニマル・セラピーという表現は、動

物介在介入にあたるものといえよう。

動物介在介入は、人が人に対して直接関わり合う関係に動物を介在させるという三角関係を作る。その動物を介在させることによって、人の心身の状態を向上させたり、維持させたり、緩和させたりする。よって、介在（Assisted）という言葉は、動物介在介入のプログラムにおいて重要な意味合いを持つ言葉なのである。

#### 3. 動物介在介入のプログラム

動物介在介入のプログラムを作成するうえで、まず人が人に対してアプローチするためのプログラムを基本とする。そして、人と動物の双方の福祉と危機管理を前提としたうえで、そのプログラム上にどのような動物をどのように介在させることでより効果が得られるのかを考えプログラムを再構築していく。そこには、人と動物の両方を専門的に学んできている人材、つまり動物介在介入を専門とするセラピストあるいはコーディネーターの存在が必要となる。

日本の現状を見てみると、日本のアニマル・セラピーは、動物を人に触れさせればよい効果が自然と期待できるものと思われている傾向にある。そのため、介在犬でいえばその犬の素質や育成ばかりが注目され、その飼い主への教育が追いついていないように思われる。また、動物介在介入のセラピストあるいはコーディネーターの数そのものも少なく、そして、その人材を育成するプログラムも少ない。

#### 4. 動物が人に与える効果

動物の存在が人の心身により効果を与えることに対して、異論を唱える人は少ないと思われる。しかし、どのようなよい効果があるのかということにおいては、経験的な報告が多く、調査や研究による数字での効果測定や評価は少ないのが現状である。この要因として、動物が

人に与える効果は、一元的ではないことにある。動物介在介入の分野は、まだ症例を多く集めている段階にあり未熟な分野といえるが、様々な角度から研究および報告がされてきている。そして、大きく3つの効果があるとされている。1番目に無理なく身体を健康を維持・増進・緩和させる生理的効果。2番目に無理なく安心感をもたらす心理的効果。3番目に無理なく人と人の協力関係をもたらす社会的効果。この3つの効果が混ざり合っただけで人により効果をもたらしてくれるものと考えられる。これらの効果は、人が人に対して難しい効果でも、動物は無理なく引き出してしてくれる。その無理なく引き出してくれた時こそが、セラピストらが介入する大切な機会となるのである。

## II. クライアントと介在犬とのマッチングシステムの開発 I - 介在犬の定義 -

### 1. はじめに

前述のとおり全国的に展開されている動物介在介入だが、その実施主体は個人からNPO法人等の団体までと様々であり、それぞれが独自に動物介在介入に参加する動物の適正評価基準を設けている。それらの多くは、ある種の動物に対してその種全部を対象に一律の基準を満たすことで参加の適正を評価する方法がとられているようである。そして、アニマル・セラピーが新聞やテレビ等で取り上げられるとき、人よりも動物がクローズアップされる傾向にある。

しかし、本来、動物介在介入は、クライアントの心身の回復・維持等の目的を達成するために、プログラム上に動物をどのように介在させるかが重要となってくる。そして、中心となるクライアントの動物へのニーズは多様なはずである。この多様なニーズに答えるためには、介在させる動物の適正評価にも多様性が求められるのではないかと考えられる。

そこで、動物介在介入を実施するうえにおいて、クライアントのニーズに答えるための動物、特にここでは犬の選定システムの開発を試み、その前提となる介在犬の定義について、アンケート調査をもとに考察したので報告する。

### 2. アンケート調査方法

- (1) 調査対象者  
福祉系専門学校生157人（男性90人、女性67人）
- (2) 調査期間  
2001年11月－2002年2月

- (3) 調査方法  
会場アンケート調査
- (4) 調査内容  
犬に関するアンケート調査（表1）

#### ◆追加調査

- (1) 調査対象者  
福祉等に関わる方82人（男性23人、女性59人）
- (2) 調査期間  
2009年3月－4月
- (3) 調査方法  
会場アンケート調査
- (4) 調査内容  
犬に関するアンケート調査（表1）

### 3. アンケート調査結果

- (1) 調査対象者  
男性90人（57.3%） 女性67人（42.7%）  
平均年齢 21.9歳

#### ◆追加調査

- 男性23人（28.0%） 女性72人（72.0%）  
平均年齢 32.2歳
- (2) 犬の飼育経験の有無  
「ある」 51.6% 「ない」 48.4%

#### ◆追加調査

- 「ある」 43.9% 「ない」 56.1%
- (3) 犬の好き、嫌い  1 のとおり
- (4) 犬の好きなところ  2 のとおり
- (5) 犬との心地よい時  3 のとおり
- (6) 犬の嫌いなところ  4 のとおり

### 4. 考察

専門学校で勤務していた10年間、1カ所の介護老人保健施設へ毎週金曜日の午後学生と学校犬とともに動物介在介入の実習を実施していた。（このプログラムについては、第8回日本臨床獣医学フォーラム年次大会2006ケースカンファレンスで発表したところである）。この間を通して、プログラムを受けるクライアントの犬へのニーズは様々であるように思えた。

そこで、以前調査した犬に関するアンケート調査結果および2009年3月、4月に追加調査を実施した。

2 のグラフのように、犬に対する好きなところは、かわいい13.3%、愛嬌がある10.8%、一緒に遊べる9.1%、いやしてくれる8.6%など多岐にわたる。また、 4 のグラフからは、基本的なしつけと衛生管理がなされてい

表1 犬に関するアンケート調査表

**【犬に関するアンケート調査】**

平成 年 月 日

◆当てはまる語句に○印をつけるか、あるいは空欄に記入をしてください。

問1. あなたの性別を教えてください。 1. 男性 2. 女性

問2. あなたの年齢を教えてください。 ( ) 才

問3. あなたはこれまでに犬を飼ったことがありますか？ 1. ある 2. ない

問4. 問3で、「ある」と答えた方にお聞きします。犬を飼っていた期間はどの位ですか？  
\* 足りない方は裏面に記入をしてください。

① ( )才頃から飼育 犬種( )  
室内犬 / 室外犬 飼育期間 ( )年 ( )ヶ月

② ( )才頃から飼育 犬種( )  
室内犬 / 室外犬 飼育期間 ( )年 ( )ヶ月

③ ( )才頃から飼育 犬種( )  
室内犬 / 室外犬 飼育期間 ( )年 ( )ヶ月

問5. あなたは犬が好きですか、嫌いですか？  
1.好き 2.どちらかという好き 3.どちらともいえない 4.どちらかという嫌い 5.嫌い

問6. 犬のどういうところが好きですか？(複数回答可)

1.顔つき 2.体型 3.かわいい 4.かっこいい 5.おとなしい 6.愛嬌がある  
7.かっこいい 8.仕草 9.ぬくもり 10.手触り 11.抱き心地が良い  
12.甘えてくる 13.一緒に遊べる 14.従順 15.忠実 16.いやしてくれる  
17.その他( )  
18.特にない

問7. 犬と何をしている時が心地良いですか？(複数回答可)

1.眺めている時 2.散歩している時 3.遊んでいる時 4.フードをあげている時  
5.ブラッシングをしている時 6.抱きかかえている時 7.一緒に寝る時  
8.その他( )  
9.特にない

問8. 犬のどういうところが嫌いですか？(複数回答可)

1.顔つき 2.体型 3.仕草 4.よだれ 5.におい 6.くさい  
7.毛が抜ける 8.なめる 9.かじる 10.ほえる 11.追いかけてくる  
12.飛びつく 13.言うことを聞かない 14.しつけの悪い犬 15.散歩  
16.フンの始末 17.お金がかかる 18.死別  
19.犬種( )  
20.その他( )  
21.特にない

ご協力をしていただきまして、ありがとうございました。

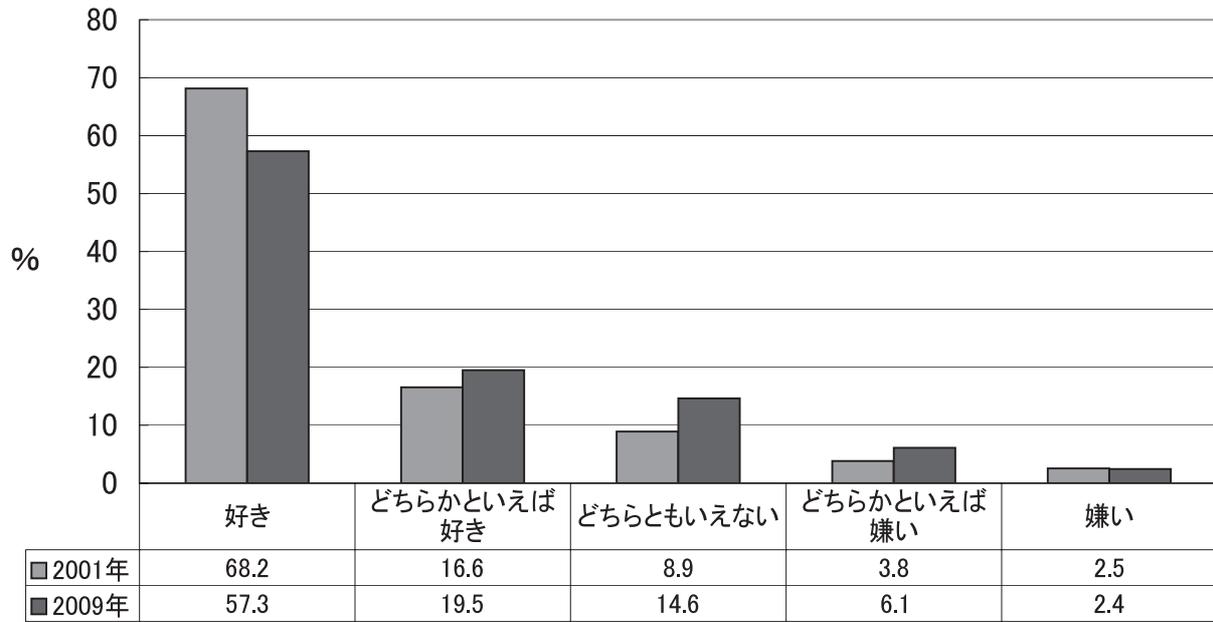


図1 「問5 あなたは犬が好きですか、嫌いですか？」

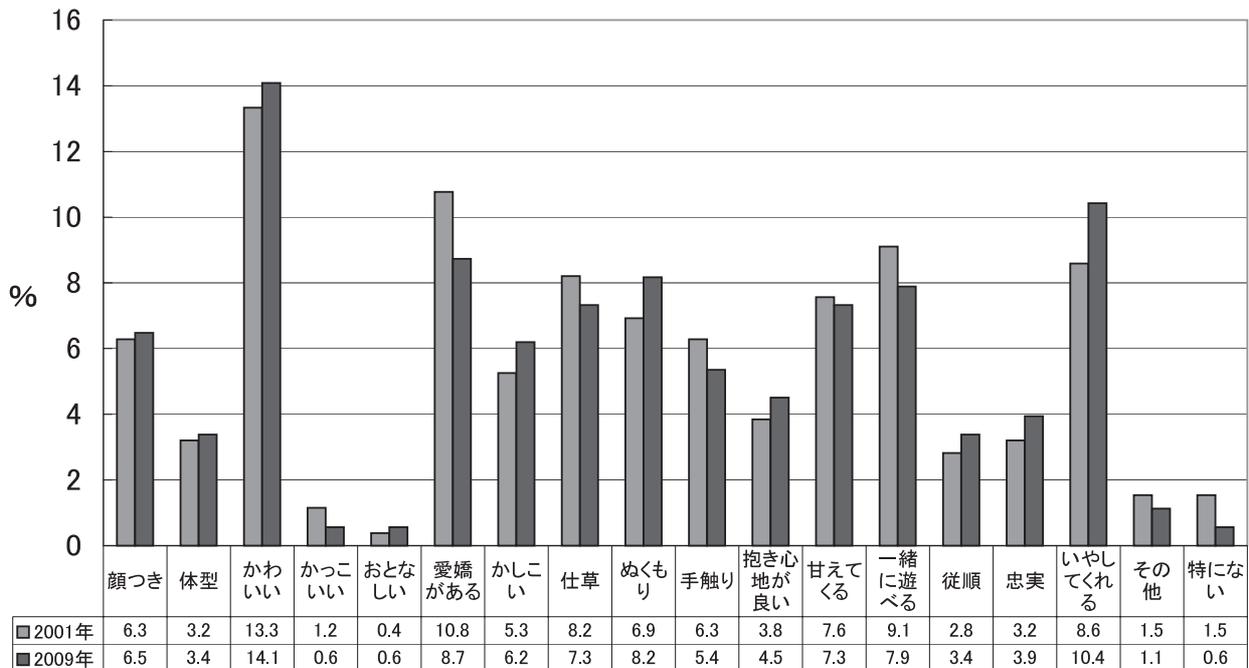


図2 「問6 犬のどういうところが好きですか？（複数回答可）」

れば、多くの方の理解が得られるものと推察される。これらの結果からは、介在犬という犬のどの部分を意識して、クライアントに関わらせるのかの指針となるかもしれない。

そして、図3のグラフから7項目のみではあるが、人が犬に対して心地良いことが様々であることが分かった。このことは、クライアントに対して犬を介在させたプログラムを組む上で、クライアントが犬に対する心地よいというニーズを反映させたプログラムを組むことの必要性が読み取れる。つまり、クライアントのプログラム参

加の意欲の高まりや心身の安定などより効果的なプログラムになることが示唆される。

犬に関するアンケート調査の結果から、人から犬へのニーズには多様性があり、これらのことは介在犬にも多様性が求められてくるものと考えられる。

介在犬の定義あるいは適正評価等を考えたとき、1つの枠に当てはめると犬の多様性を認めないことにもつながりかねない。人にも多様性があるように、犬、さらに介在犬にも多様性があるべきと思われる。

したがって、介在犬として、健康管理および疾病予防、

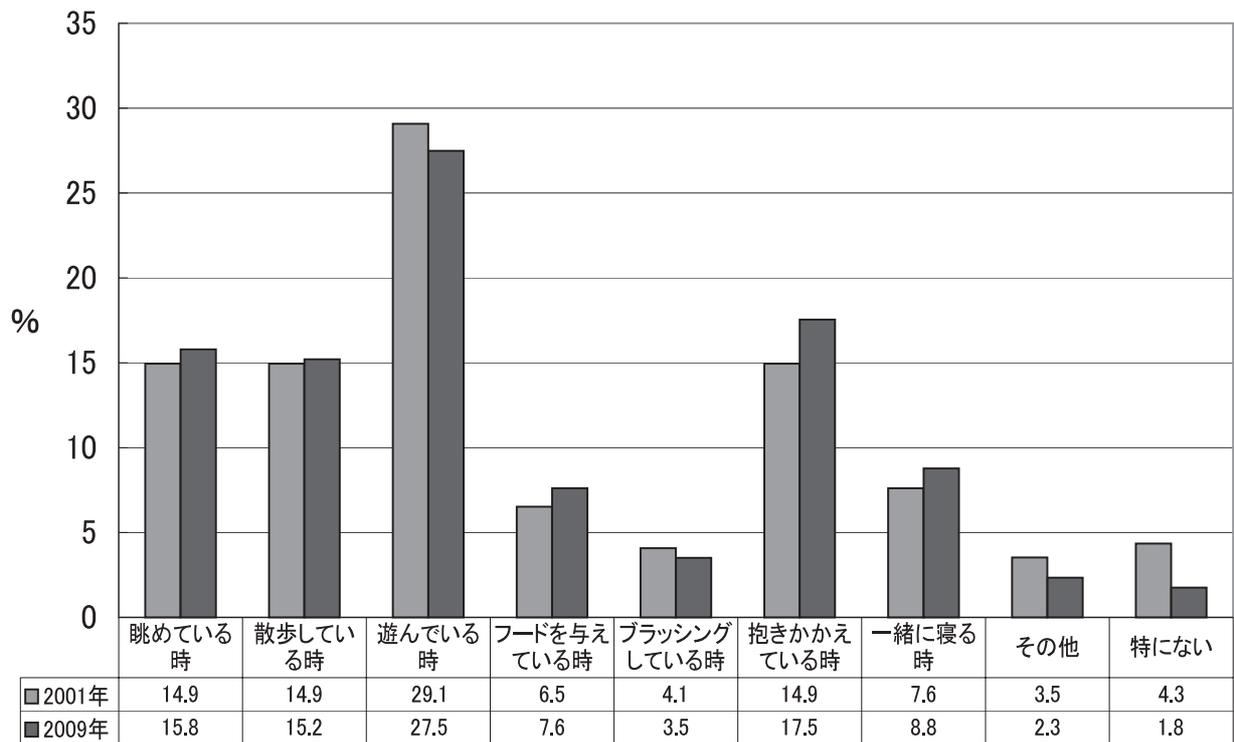


図3 「問7 犬と何をしている時が心地良いですか？（複数回答可）」

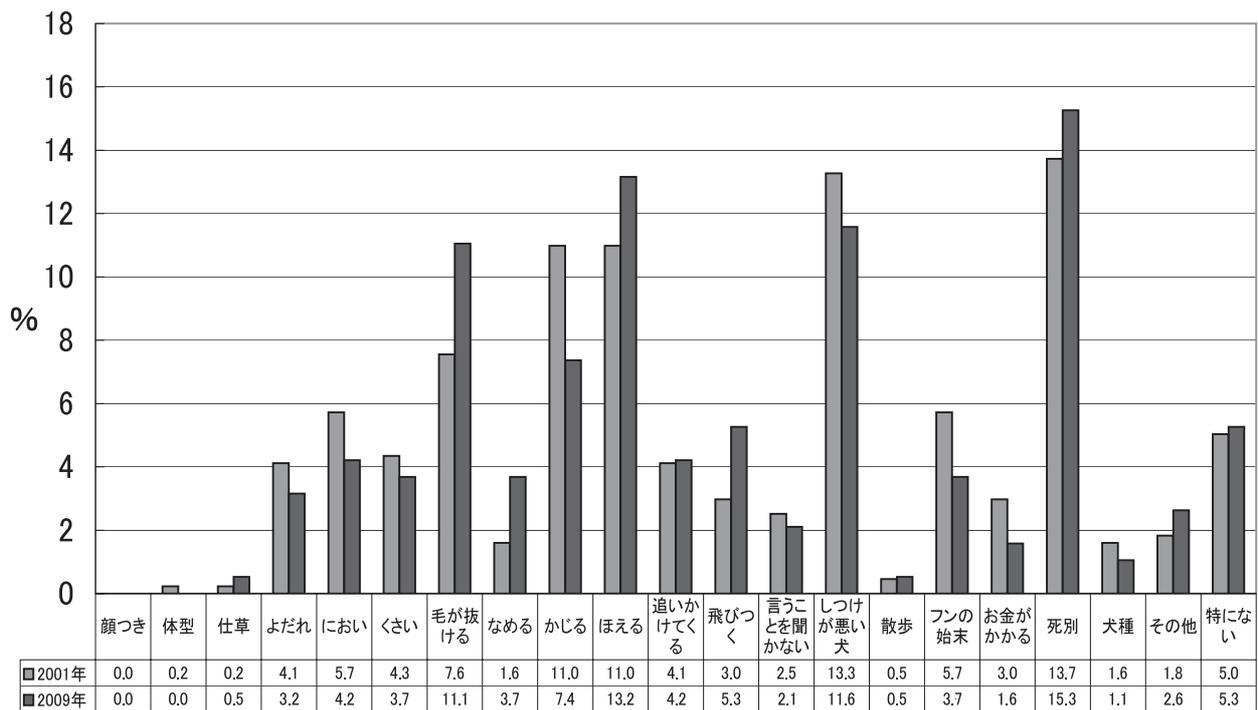


図4 「問8 犬のどういうところが嫌いですか？（複数回答可）」

人に友好的な性格、基本的なしつけといった必須条件が満たされた上で、人のニーズに合った犬の特徴をカテゴリー別に登録していく方式を提案したい。

この方式であれば、その犬の持ち味が発揮される。さらにその家族もあらためて犬の特徴を認識し、犬にもストレスが少なくすむ。そして、多くの飼い犬が介在犬

として登録ができ、動物介在介入の普及にもつながるものと思われる。

今後、「獣医師の誓い-95年宣言」を理念としながら、クライアントの多様性と介在犬の多様性を一致させるマッチングシステムの開発ならびにその実績を発表していくこととする。